

○辻泰弘君 民主党の辻泰弘でございます。田波さんに三点にわたり御質問をさせていただきます。

まず第一点は、総裁人事の在り方についてでございます。

田波さんは昭和三十九年から平成十一年まで大蔵省に在籍されておりますが、その間の日銀総裁の人事は、まさに日銀OBと大蔵OBとの輪番、たすき掛け人事でございました。しかも、大蔵省OBはすべて事務次官経験者だったわけでございます。今回の総裁人事については、マスコミでも財務省の組織を挙げた動きがすさまじかったと指摘されております。

田波さんも大蔵省出身で事務次官経験者でいらっしゃいます。武藤さんの後の田波さんでございます。言わばミスター財務省の後のミスター大蔵省でございます。今回のことについて、田波さんは輪番、たすき掛け人事の復活、新たな始まりという指摘、批判にどうお答えになるのでしょうか。あわせて、OBが日銀総裁ポストに就くことの財務省のメリットを御教示いただきたいと思っております。

二点目、これまでの御経験に関連してお伺いいたします。

今日、経済のグローバル化、金融の多様化、複雑化が急速に進展を続ける中で、日銀総裁には高度な専門知識と語学力、国際的な交渉能力が求められると思っております。田波さんはこれまで国内中心の御活躍だったと思っておりますが、日銀総裁という重責を担うに値する金融知識、国際性、語学力を身に付けているという自己評価をお持ちでしょうか。通訳なしの中央銀行総裁だけの議論や交渉の場に臨むこともあると考えますが、日本の中央銀行総裁として十分その任を全うできるとの自信をお持ちでしょうか。

三点目、政府の政策とのかかわりについてお伺いいたします。

従来から政府、日本銀行は一体となった取組を行うとの方針が政府の閣議決定などでも示されてきているわけですが、田波さんは政府の財政政策、財政運営に対して日銀としていかなる形において一体となった取組を行っていくつもりなのか、御所見をお伺いしたいと思います。

以上でございます。

○参考人(田波耕治君) 最初の人事の在り方でございますけれども、ミスター財務省だ、ミスター大蔵省だというのはちょっと、率直に言って全く私はびんときておりません、正直言ってですね。どちらかというと、今国際協力銀行、JBICと言っているんですけれども、世界、中東に飛んだりロシアに飛んだり、アジアの現場で貧困の仕事をしたりしてまいりましたから、余りそういうことを感じるという暇が今までなかったと思っておりますし、財務省のメリットというのは、どうでしょうか、よく分かりませんが、そういう問題のとらえ方はそもそも余り適当ではないと言うのは失礼かも知れませんが、やはりその人間が何をやるかということに私は尽きるように思います。

それから、二番目の質問は非常に厳しいお話でございまして、私は、若いころアメリカに四年おりました。それから、JBICに参りまして七年、その前に大蔵省の顧問ということで世界を飛び回っておりましたんで、多少のことはできると思っておりますけれども、一〇〇%自信があるのかというふうに言われると、なかなかそういう方々ばかりではない。少なくとも日本人の、何というか、感性としては、自分はまだ一〇〇%金融も語学力も間違

いなくあるんだということを言い切るような私は余り感性を持っておりませんので、その程度で失礼をさせていただきたいと思います。

それから、政府、日銀一体での取組というのも、先ほどちょっと申し上げましたけれども、やはり日銀法にもう非常にはっきり書いてあり、日本銀行は、その行う通貨及び金融の調節が経済政策の一環を成すものであることを踏まえて、この経済政策というのは当然のことながら政府がやるわけで、政府の経済政策の基本方針と整合的になるように常に政府と連絡を密にし十全な意思疎通を図らなければいけないと。つまり、金融政策の決定ということと意思疎通ということはおのずから明らかに違うんで、法律ではっきり一体として取り組みなさいと。これはどう考えても金融も経済の、広い意味の経済の一環でございますから、そこの間のシンクロがうまくいかないということは適當ではないというふうに私は個人的に考えている次第であります。